

クリスマスの贈り物

マタイの福音書 2章 1-12節

はじめに

今日の聖書の箇所は、「**東の方**」から来た「**博士たち**」が、イエス様の誕生を祝う出来事が書かれています。

クリスマスという言葉は、英語で書くとよく分かりますが、「Christ」という言葉と「Mass」という言葉が組み合わされている言葉です。「Christ」というのは「キリスト」のことで、「Mass」というのは「ミサ」「礼拝」のことです。ですからクリスマスというのは、キリストの「ミサ」、キリストの「礼拝」という意味です。

今日の聖書箇所に出てくる東の方から来た博士たちは、まだ赤ん坊であったイエス様を見つけ出し、「**贈り物**」を献げ、「**ひれ伏して礼拝した**」とあります。つまり彼らは、イエス様を礼拝したのです。その意味で、この博士たちの姿には、本当の意味での「クリスマス」があったと言えます。

1. 東の方から来た博士たちとは？

では、今日の聖書箇所に出てくる東の方から来た「博士たち」とは、どんな人たちでしょうか。彼らは、「**星が昇る**」のを見て、「**エルサレム**」までやって来たというのですから、「星を研究する学者たち」であったようです。彼らは、「**ユダヤ人の王としてお生まれになった**」「**キリスト**」の星のことも研究していたようです。そしてついに「**東の方**」でその星を見つけたので、エルサレムまでやって来て、「ユダヤ人の王としてお生まれになった」「キリスト」を礼拝しに来たのです。

彼らの研究では、「キリスト」が生まれた場所までは分からなかったようです。ですからユダヤ人の中心地であるエルサレムに行けば、誰かにキリストが生まれた場所を教えてもらえるはずだと考えて、とりあえずエルサレムまでやって来たのです。

彼らは一体どこからやって来たのでしょうか。「東の方」としか書かれていませんので、詳しいことはよく分かりませんが、おそらくバビロンやペルシャからやって来たのであろうと言われます。いずれにしても彼らは、ユダヤ人ではなく異邦人であったのです。

このように異邦人である博士たちがエルサレムにやって来て、「ユダヤ人の王としてお生まれになった」「キリスト」がお生まれになったという知らせを告げるというのが、今日の聖書箇所の始まりです。

2. ヘロデ王の自己中心的な生き方

しかしこの知らせを良く思わなかった人がいました。それは、当時ユダヤの王であった「**ヘロデ王**」です。この「ヘロデ王」は、疑い深く、残虐な王でした。彼は、自分の王としての地位を脅かす人を、とことん殺していったのです。それがたとえ家族であったとしても、です。彼は、自分の王としての地位を守るためには、何でもする王であったのです。

彼は、博士たちから「ユダヤ人の王としてお生まれになった」「キリスト」が生まれたという知らせを聞くと、「**動揺した**」と3節にあります。

そこで彼は、「**民の祭司長たち**」や「**律法学者たち**」を集めて、キリストが生まれた「場所」を調べ始めます。さらに彼は、博士たちを呼んで、キリストが生まれた「時間」を調べ始めます。そうして彼は、キリストは「**ベツレヘム**」という町で、「約二年前」に生まれたということ突き止めるのです。その結果、彼は、後になって「**ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた**」(マタイ 2:16)のです。この時、イエス様はエジプトに逃れていたの、命は守られましたが、ヘロデ王の「自分が王としての地位が奪われるのではないか」という「恐れ」は、このような残虐な行為を引き起こしたのです。

ヘロデ王は、なぜそんなにも自分の王としての地位を守りたかったのでしょうか。なぜそんなにも自分の王としての地位を奪われることを恐れたのでしょうか。

そこには、自分が支配したい、自分が中心でいたい、自分が注目されたい、自分が主役でいたい、自分が称賛されたい、自分が尊敬されたい、自分が愛されたい、そういう自己中心的な欲求が強かったからではないのでしょうか。彼は、それらの欲求を手に入れるために、またそれらの欲求を守るために、必死になっていたのです。

しかしそのような彼の生き方は、果たして幸せだったのでしょうか。彼の生き方に付きまとう感情は、いつも恐れや不安や心配でした。彼はいつも、自分の王としての地位にしがみつき、それを奪われるのではないかとこの恐れや不安や心配といつも戦っていたのです。そしてそれを奪う疑いのある人にはいつも、妬みと敵意と憎しみを向けていたのです。

彼のように、自己中心に生きる生き方は、いつも恐れや不安や心配で心がいっぱいになり、他人に対しても、妬みや敵意や憎しみを向けることしかできないのです。つまりいつも心に平安がなく、他人とうまく関係を築けないのです。その結果、疲れと孤独がその人を支配するようになるのです。

3. 東の方から来た博士たちのキリスト中心的な生き方

このような生き方と対照的なのは、東の方から来た博士たちの生き方です。彼らは、自己中心ではなく、キリスト中心です。キリストに「贈り物をささげ」、キリストを「礼拝する」生き方です。つまりキリストに注目し、キリストを主役にし、キリストを賛美する生き方です。彼らは、自分にこだわっていません。自分に固執していません。自分にしがみついてもいません。自分の欲求を手に入れたり、守るために、必死になることもありません。

彼らの生き方を支配する感情は、10節にあるように、「**この上もない喜び**」です。この「この上もない喜び」という言葉は、直訳すると「**激しく、激しく、喜び、喜んだ**」という言葉

です。つまり「激しい」という言葉が2回繰り返され、「喜び」という言葉も2回繰り返されているのです。つまり彼らには、非常に大きな喜びがあったということです。

これらのことから分かることは、キリストを中心に生きる生き方には、大きな喜びがあるということです。自分に固執しなくて良いので、何かが奪われる恐れや不安や心配に支配されることはないのです。

4. キリストはどんな方か？

では、そのように私たちに大きな喜びを与えるキリストとは、どんな方なのでしょう。実は、博士たちが献げた「贈り物」に、キリストがどんな方かが示されているのです。

博士たちは、「**黄金、乳香、没薬**」をキリストに献げました。「黄金」というのは、当時「王様」に献げられる物でした。ですからキリストは、「王」である方と言えます。しかしキリストは、決してユダヤ人だけの王ではありません。イエス様は十字架に付けられる時、ポンテオ・ピラトに「**あなたはユダヤ人の王なのか**」(ヨハネ 18:33)と問われた時、「**わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません**」(ヨハネ 18:36)と答えました。イエス様は、イエス様を信じる人たちが属する「神の国」の王です。それは国境を越えて、また時代を超えて、全世界また全時代に及びます。キリストは、「神の国」の王として、いつも私たちを守り、導いてくださる方なのです。

また「乳香」というのは、当時「祭司」が用いる物でした。ですからキリストは、「祭司」である方と言えます。祭司は、神様と私たち人間を結び付ける働きをします。キリストも、私たちを神様へと導いてくださるのです。キリストは、私たちの仲保者として私たちの罪を贖い、私たちのためにとりなし、私たちと神様との関係を回復してくださる方なのです。

最後の「没薬」ですが、この没薬という言葉は、今日の聖書箇所以外に新約聖書に2回しか出てきません。その2回というのは、いずれもイエス様の十字架の場面です。十字架上で痛み止めとして差し出される場面と、十字架後に遺体に塗られる場面です。ですからキリストは、十字架に架かれる方だと言えます。イエス様は、私たちの罪を償うために十字架に架かり、私たちに罪の赦しと永遠のいのちを与えるために、十字架に架られました。

その意味でイエス様は、キリストとして、私たちの仲保者として、私たちの罪を償うために十字架で死なれ、私たちと神様の関係を回復させ、私たちをいつも守り、導いてくださる方だと言えます。

おわりに

博士たちは、このイエス様を礼拝するために、東の方から旅をして来たのです。この旅に、どのくらいの時間がかかったのでしょうか。博士たちがイエス様の所に来た時には、イエス様は二歳ぐらいになっていたかもしれないので、もしかしたらその旅は、二年くらいかかったのかもしれませんが。彼らは、イエス様を礼拝するために、数年かけて旅をしてきたのかも

しれません。またこのような長旅には、多くの苦労があったと思います。長旅の間の衣食住のために費用は多くかかったでしょう。彼らは、黄金・乳香・没薬という高価な贈り物を持って旅をしていたので、盗賊に襲われる危険もあったことでしょう。彼らは、多くの犠牲とリスクを背負って、イエス様を礼拝しに来たのです。

なぜ彼らは、このように多くの犠牲とリスクを背負ってまで、イエス様を礼拝しに来たのでしょうか。それは、彼らには信仰があったからです。イエス様こそ、神の国の王であり、私たちの罪を贖う救い主であるという信仰があったからです。実際、彼らがイエス様のもとに来た時、イエス様はまだ赤ん坊でした。それでも彼らは、イエス様を礼拝したのです。彼らに信仰がなかったら、目の前にいる赤ん坊を礼拝したり、その赤ん坊を神の国の王であるとか、私たちの罪を贖う救い主であると考えすることはできなかったでしょう。彼らには、イエス様に対する確かな信仰があったからこそ、イエス様を礼拝し、イエス様に贈り物を献げたのです。

この博士たちの姿を見る時、私たちの礼拝の姿勢が問われる思いがします。私たちは、この博士たちのように、多くの犠牲とリスクを背負って、イエス様を礼拝しているだろうか。イエス様に対する確かな信仰をもって礼拝しているだろうか。信仰から出てくる精一杯の献げ物を献げているだろうか。

また彼らの礼拝には、何の見返りも期待しない姿が見られます。彼らはただ赤ん坊のイエス様を礼拝し、黄金・乳香・没薬を献げただけです。イエス様に癒してもらおうとか、祝福してもらおうとか、励ましてもらおうとか、慰めてもらおうとか、そういう思いは全く見られません。彼らは、ただただイエス様を礼拝したのです。しかし彼らには、大きな喜びがあったのです。

私たちは、礼拝に何を求めているのでしょうか。私たちは、何のためにイエス様を礼拝するのでしょうか。私たちが恵まれるため、祝福されるためでしょうか。それとも、イエス様をあがめるためでしょうか。礼拝は、私たちのために行うのでしょうか。それともイエス様のために行うのでしょうか。博士たちが礼拝したのは、赤ん坊のイエス様でしたから、彼らはイエス様から恵まれるとか、祝福されることは期待していません。彼らはただただイエス様を礼拝したのです。その結果、彼らには大きな喜びがあったのです。私たちは、自分が恵まれるため、祝福されるために礼拝するのではなく、イエス様のために礼拝を献げる時、心から満たされ大きな喜びが与えられるのではないのでしょうか。

博士たちは、自分が恵まれるため、祝福されるために、多くの犠牲とリスクを背負って、また贈り物を持って礼拝しに来たではありません。彼らは、ただただイエス様を礼拝するために、それらを行なったのです。

クリスマスにおける博士たちの礼拝は、私たちに本当の礼拝のあり方を教えてくれるものなのではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

東の方から来た博士たちの、イエス様に対する信仰と礼拝の熱心さを教えられました。私たちは、何のためにあなたを礼拝しているのでしょうか。自分のために礼拝しているのでしょうか。それともあなたのために礼拝しているのでしょうか。あなたのかたちに造られた私たちは、あなたを心から礼拝する時に満たされ、喜びに包まれます。自己中心に生きる時には、いつも不安と恐怖と心配に支配されます。どうか、自己中心に生きる生き方ではなく、あなたを礼拝する生き方へと私たちを変えてください。毎週の礼拝に、博士たちのような熱心を与えてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。